タイトル（24 pt）

サブタイトル（14 pt）

○○　○○（16 pt）

1　大見出し（10.5 pt）

1・1　中見出し（9 pt）

1・1・1　小見出し（9 pt）

本文（9 pt）このテンプレートは，「技術紹介」欄に投稿いただく際にご使用いただくものになります。原則として受理された原稿に基づいて組版いたします。

投稿に際し，「ぶんせき」執筆要領をご覧ください。以下に本誌の原稿作成指針を示します。

ここに示したようなフォーマットでの原稿作成が困難な場合には，編集委員会へご相談ください。

原稿を作成するにあたり，上付き・下付き，*Italic*，**Bold**などの指定は確実に行って下さい。スタイルを指定し，フォントの上付き・下付き，イタリック，ボールドの各属性を指定してください。

【技術紹介】の内容及び執筆上の注意

12000 字以内（図，表などを含む）

内容：企業や機関が保有する独自の技術や装置の特長，開発経緯，性能，応用などを科学的根拠に基づいて論じた紹介記事。会員に対して，技術や装置の導入、または、これらの利用の契機となるような情報提供を目的とする。

執筆上の注意

1. 必ずしも新規の技術や装置である必要はなく、既存の技術や装置に関わるものでもよい。社会的要求が高い内容は，データの追加などで繰り返し紹介しても構わない。
2. 製品を開発した経緯や測定法を開発する重要性など、背景を一番初めの項に記載してください。
3. 著作権が設定されている図・表、または元のま　まの文章などを利用する場合について，執筆要領の［著作権］②に基づいて適切に対応すること。
4. 保有する技術や装置の特長または性能を科学的

に説明していること。

1. 保有する技術や装置の優位性を論じるために，比較対象を否定・貶めるような表現は避けること。
2. 本文の構成要素として，「技術や装置の紹介・特長・優位性」，「その根拠となるデータ」，「考察」などが含まれていること（上記のカッコ書きは，各項の名称として求めるものではない）。
3. 専門用語は，最新の「学術用語集化学編（文部科学省）」または「分析化学用語集（日本分析化学会編）」を参照すること。
4. 製品名（商標名）は， 使用しても構わない。

2　大見出し

「技術紹介」欄の原稿は本テンプレートで作成して下さい。

原則，対応の段落スタイルを適用させればよいですが，参考までに基本設定を記します。

ページの余白は以下の通りです。変更はできません。

上　20mm，下　20 mm，左　20 mm，右　20 mm

一行の文字数（2段組） 25文字

1ページの行数 49行

　　タイトル 24 pt

　　著者名 16 pt

　　大見出し 10.5 pt

　　中・小見出し 9 pt

　　本文 9 pt

　　謝辞 8 pt

　　脚注 8 pt

　　文献 8 pt

執筆要領に記載の「原稿の書き方」に基づいて注意事項を記します。

1 題　名

記事の内容を的確に示したものとし，依頼時の題名と大幅な変更のないようにする。また，普通名詞化したものを除き，原則として商品名及び略号を用いない。

2 本　文

2.1 原稿は，原則としてMicrosoft Wordで作成する。

2.2 文章は，原則として平仮名書き，平易で簡潔な文章体（「である」式）とし，常用漢字と現代仮名遣いを用いる。

2.3 大見出し，中見出し，小見出しなどは，1, 2, ... , 1·1, 1·2, ... , 1·1·1, 1·1·2, ... , (1), (2), ... , (a), (b), ... などとし，大見出し，中見出しの前は 1 行あける。

2.4 句読点，括弧は，1 字に数え，原稿の書き始め及び行を改めたときの書き始めは，1字あける。なお，句読点には「。」「，」を用いる。

2.5 書体の指定や誤読されやすい文字は，黒鉛筆等で適切な指示をする。

2.6 外国の人名，会社名などは，原則としてローマ字綴りで書き，周知の術語となっている人名などは片仮名書きとする。また，欧米語は，原則としてすべて小文字とする。ただし，固有名詞は大文字で書き始め，学名はイタリック体とする。

2.7 特殊な文字，書体，記号はできるだけ避ける。また，添字の添字は特別な理由のない限り避ける。

2.8 略号は，最初に出てくる箇所で正式名称の後に に入れた略号を付記する。

2.9 脚注は，原則として用いず括弧を用いて本文中に書く。やむを得ず用いる場合は，本文中その項目の右肩に \*1 \*2 を付け，そのページの下段に書く。

2.10 引用文献がある場合は，本文中その項目の右肩に 1) 2) のように，通し番号を付け，本文の最後に文献欄を設けまとめて書く。また，引用する人名は，原則として第一著者の姓のみを記 し，敬称は付けない。その 他を略して「……ら」とする。欄によってはこの限りではない。

2.11 図，表及び写真を使用する場合は，図 1，表 1，写真 1などと本文中に明記し，このドキュメントの末尾の空白ページに貼り付けておく。

2.12 構造式を使用する場合は，原則として〔I〕, 〔II〕, 〔III〕などと本文中に記す。

2.13 図，表，写真各 1 枚は，原則として500字相当分とする。

（2.11～13に関連して4 表，5 図，構造式，6 写真も参照のこと）

3　文　献

3.1 著者，編者，訳者名 などは，原則として 全員記載し，“……ら”，“...... et al.”とはしない。また，邦字人名の場合は姓のみでなく名も記し，欧字人名の場合は名前の頭文字，姓の順に書く。

3.2 雑誌名は，和文誌の場合は原則として略さず，欧文誌の場合は原則として最近のChemical Abstractsに従う。また，“同上”,“*ibid.*”は原則として用いない。

3.3 原著の参照しにくい論文は，原著とともに Chemical AbstractsまたはAnalytical Abstractsを併記する。また，参照しやすい翻訳誌が刊行されている場合は，それを併記する。

3.4 投稿中の論文，私信，未発表データなどは，原則として重要な資料としては用いない。

3.5 Web siteの引用は極力控える。もし，引用した場合はURLのほか，Web siteを作成している企業名，大学名などの情報もできるだけ記載する。また、引用したサイトを確認した最終年月日も記載する。

3.6 記載方法は，次の様式による。その他，詳しくは 最新の“「分析化学」投稿の手引き付記A4”を参照。

1) 今枝一男 , 大沢敬子 , 横田貴史 : 分析化学 , 31, 120 (1982).

2) J. Leibenguth, M. Roynette, M. H. Soltany: *Analusis*, **9**, 377 (1981): {*Chem. Abstr.*, **95**, 231466j (1981)}.

3) M. M. Kuz'min: *Zavod. Lab.*, **48**, (2), 11 (1982); {lnd. Lab., 48, 118 (1982)}.

4) 青村和夫:“新版水の分析”, 日本分析化学会北海道支部編 , p.179 (1980), (化学同人).

5) R. M. Measures: “*Analytical Laser Spectroscopy*”, Edited by N. Omenetto, p.362 (1979), (John Wiley & Sons, lnc., New York).

6) 辻内順平訳:“フーリエ変換とその光学への応用”, p.81 (1977), (共立出版); {P. M. Diffieux: “*L'lntegrale de Fourier et ses Applications a l'Optique*”, (1970), (Masson et Cie, Paris)}.

7) 小出年男 , 高田健夫 , 中埜邦夫 : 日本分析化学会第 31 年会講演要旨集 , p.458 (1982).

8) K. Matsumoto, K. Fuwa: Abstracts of VI International Symposium on Solute-Solute-Solvent Interactions, p.85 (1982), Osaka.

9) 住友金属工業: 日特公, 昭56-34,061 (1981.9.7).

10) JIS G 1215, 鉄及び鋼中の硫黄定量法 (1982).

11) T. M. Stevens, T. E. Miller, Jr.: U. S. Patent, 4290775(1981.9.22).

12) ASTM E 169-63, General Techniques of Ultraviolet Quantitative Analysis (1963).

13) 廃棄物情報の提供に関するガイドライン, 環境省, 〈http://www.env.go.jp/recycle/misc/wds/〉 (2019年9月30日, 最終確認).

14) TOYOTAグリーン調達ガイドライン, トヨタ自動車(株), (2016), 〈https://www.toyota-ej.co.jp/images/activities/Green\_Supply\_Guideline\_201609.pdf〉 (2019年4月8日, 最終確認).

15) 有機化合物のスペクトルデータベース: SDBS, 産業技術総合研究所，〈https://sdbs.db.aist.go.jp/sdbs/〉 (2019年2月5日, 最終確認).

4　表

4.1 表題，説明などは，すべて日本語とし，よく整理して分かりやすく書く。

4.2 脚注は，†などを用いて表の下に書く。

4.3 本文原稿とは別にまとめるか，本文中の初出の文章の前または後ろに挿入する。

5 図，構造式

5.1 表題，説明などは，すべて日本語とし，直接図面原稿中に書き入れる。

5.2 明瞭，正確で，完全なものを作成する。やむを得ずコピーを使用する場合は，原図の誤りに注意し，図柄中の欧米語を日本語に直す 。

5.3 図の大きさは，片段（7.5 cm），全段（15 cm）以内とし紙面に掲載のサイズでの作成が望ましい。

5.4 図柄中の記号は，なるべく簡単なものを用いる。

5.5 図の縦軸，横軸の目盛りの数値の説明は，原則として「物理量／単位」のように表記する。

5.6 本文原稿とは別にまとめるか，本文中の初出の文章の前または後ろに挿入する。

6 写 真

6.1 表題，説明などは，すべて日本語とし，写真の下に書き入れる。

6.2 白黒で，コントラストの鮮明なものが望ましい。

6.3 本文原稿とは別にまとめるか，本文中の初出の文章の前または後ろに挿入する。

7 専門用語

最新の“学術用語集化学編”（文部省）または“分析化学用語集”（日本分析化学会編）を参照。

8 化合物名

8.1 原則として IUPAC 命名法に従い日本語で書く。ただし，誤解のおそれがなく，理解しやすい場合には，元素記号，化学式を用いても差し支えないが，その際は一原稿中で統一する。

8.2 最新の“化合物命名法”（日本化学会標準化専門委員会化合物命名小委員会編）を参照。

9 物理量の記号，単位，数と数式

9.1 物理量の記号及びその使用上の規約は，なるべく IUPACの勧告に従い，慣用のものでも最初に出てくる箇所でその定義を明示する。

9.2 単位は，できるかぎり国際単位系（SI） を用いる。

9.3 数式は，本文文章中では (a+b)/(c+d) のように書く。ただし，式だけを別行に書く場合は，

$$\frac{a+b}{c+d}$$

のような記載も可能とする。

9.4 物理量，単位，数及び数式については，最新の “「分析化学」投稿の手引き 付記 A2 及びA3”（毎年本誌 3 号に掲載）並びに“「物理・化学量及び単位」 に関する記号と術語の手引”（日本化学会標準化専門委員会編）を参照。

8 化合物名

　執筆者の氏名、所属等の情報や顔写真を、直接、以下の図面原稿中に書き入れる。

**氏名　　(英語表記)**

所属：OOOO株式会社 (〒OOO-OOOO 所在地)。«現在の研究テーマ»OOOOOO «趣味»〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

E-mail: OOOOOOOOO

お写真

左右28mm×天地34mm

**会社ホームページURL：**

**関連製品ページURL：**

図表配置ページ図表配置ページ

図表は本文とは別ページにまとめて配置して下さい．

片段の場合の横幅は**82mm**



Fig.1 タイトル（ピリオドなしで改行）9pt

9pt 説明文□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆□□□□■□□□□◆

全段の場合の横幅は**170mm**

最大の高さは**246mm**

1ページ大に横倒しで配置する場合は，横幅**246mm**，高さを**170mm**とします．

上記サイズは全てキャプション込みの数値です．

写真や図でカラー掲載を前提としない場合はグレースケールで作成してください．

上記サイズに則り，原寸で作成してください．

できるだけ高解像度（刷り上がり寸法で，カラー図 300ppi, モノクロ図 600ppi, ラインアート1200ppi 以上）の状態でご投稿ください。

他ソフトウェアで作成された図を貼り込み，拡大縮小が必要な場合は注意が必要です．組版時に図のサイズを調整すると，図がぼやける原因になります。必ず印刷に適した解像度で，プリントサイズが十分なもの（方段幅 8cm, 段通し 17cm 以内）をご提出願います。

カラー画像で入稿し，グレースケールで印刷する場合：

画像を処理する際に多く見受けられるのが，見た目はグレースケールでもデータ上はRGBやCMYKの場合がございます．

このような場合は強制的にグレースケールへと変換されます．

また，見た目が鮮やかなカラー画像をグレースケールで運用する場合，色の組み合わせによっては隣接色との識別が困難な場合があります．

そのようなトラブルを未然に防ぐためにも，予めグレースケールでの運用をお願いいたします．